

〔書 評〕

(I) LE DASAVATTHUPPAKARANA

Édité et traduit par
Jacqueline VER EECKE

(II) LE SĪHAḶAVATTHUPPAKARANA

Texte pāli et traduction par
Jacqueline VER EECKE

森 祖 道

(1)

(I) *Le Dasavatthuppakaraṇa*

Édité et traduit par Jacqueline VER EECKE

(Publications de l'Ecole française d'Extrême-orient Volume CVIII, Paris
1976)(II) *Le Sihalavatthuppakaraṇa*

Texte pāli et traduction par Jacqueline VER EECKE

(Publications de l'Ecole française d'Extrême-orient Volume CXXIII, Paris
1980)

上記の二書は、今示した通り、同じ編訳者の手になり、近年パリのフランス極東学院叢書として、それぞれ出版されたものである。両書は共に、パーリ語原典(ローマ字本)とそのフランス語訳及び冒頭の「序論」とをその内容としている。そこで先ず、実際の書評・紹介に入る前に、評者(私)がこの二書をこ

ここに採り上げた理由や目的、その経緯などを、若干「裏話」めいて恐縮ではあるが、最初に述べておくこととする。それは本二書（特に後書）の研究史的展望の一助ともなると思うからである。

昭和52年10月に、折から来日していたフランスのパリ第三大学教授 Colette CAILLAT 博士が、東京神田の日仏会館において“Les etudes indiennes classiques en France depuis 1965”と題して、フランスの古典インド学研究の近況を報告した¹⁾。彼女はその席上、50点以上のフランス出版の最近の研究成果のビブリオグラフィーを示したが、その中で紹介されていた (Nos. 32, 33) 今問題のヴェレック女史の二書は評者の強い関心を引き起した。即ち、No. 32 の Dasavatthupparāṇa (以下 Das) は、その前年イギリス滞在中に、オックスフォード大学の Richard Gombrich 博士よりその名を示唆されていたがなお未見の書であったし²⁾、もう一冊の Sihaḷavatthupparāṇa (No. 33, 以下 Sih, 但し当時なお未刊と記されていた) は、評者がかつてスリランカ留学中にそのテキスト（後に示す Buddhadatta のシンハラ文字版）を入手し、自分なりに研究して若干の論文と翻訳を発表したことのあるもの（後述）であったからである。そこで評者は上記のヴェレック女史に直接信書を出したいと考えて、カヤ女史の東京での世話役をなさっていた東大の原 実先生を介して、カヤ女史よりヴェレック女史の住所の教示を受けて、早速手紙を差し上げた。すると折返し返事が来て、自分は目下 Sih と Sahassavatthupparāṇa (以下, Sah. 後述) の出版を準備中であるので、評者がその私信中に触れた評者の Sih 研究の論文抜刷を、パリ在住の日本人の友人に仏訳してもらって参考にしたいから至急送ってほしいという依頼と、別便で Das を一冊送付したむねが記されていた。そこで評者は乞われるままに、当時既に部分的には不本意な点があると思い始めていた論文等の抜刷（後述）を先方に送付し、代りにやがて船便で到着した Das を拝受した。以上のような経緯があったので、評者は当時（今日でも同様）わが国では誰れも関心を寄せていなかった Das を早速紹介する義務を感じてはいたが、その時は学位論文の作成に没頭していてその余裕は全くなく、心な

らずも本書は書架に放置されたままとなった。その後昭和56年2月には、またまた約束通り待望の Sih の新刊も評者に恵贈されて来た。そこで益々この二書の書評紹介を早く公表してヴェレック女史の厚志にむくいなくてはと考えつつ、今回ようやくその機を得たという次第である。前置きが大変長くなったが以下においては、その出版順序に従って先ず Das を、次いで Sih を採り上げて若干のコメント乃至は紹介をなしてみることとする。

(2)

先ず第一の Das は、従来わが国の研究者はその存在すら知らなかったテキストであるが、本書は全体で309頁(XVI+138+155 p., A4版より一廻り小さい変型版)その内容は次のように構成されている。

序 論 pp. I-XIII

(他文献との) 対照一覧表 p. XIV

内部対照 p. XV

略号表 p. XVI

パーリ原典 pp. 1-138

フランス語訳 pp. 1-145

索引 pp. 146-153

目 次 p. 155

この内、パーリ原典の部分は総計37の短い説話の集成であり、その文章は韻文と散文の混淆文である。その所説内容は主として、在家仏教信者の仏・僧団・仏塔などに対する布施供養の物品やその功德意義など広く布施思想を説いたものであって、これは比丘たちが在家信者に説教する際の手引書的性格を有したものと考えられる。

さてヴェレック女史の「序論」はその冒頭において (p. I) Sah, Rasavāhini (以下 Ras), Sih の三書³⁾ の名を列挙し、それに Das を加えてこれらを「パー

リ語で著わされた教訓的性格を有する仏教的物語集であり、いずれも同一の文学脈に属するとみられるもの」と定義している。そしてこれらは評者の言う「歴史資料的仏教説話集」としての広義のアッタカター文献の一種に外ならない⁴⁾。但し他の三書と比較して、Das は歴史資料的性格が最も乏しいと見られる。

次いで「序論」(pp. I-IV) は、Sah, Ras, Sih の順で各書の文献的特性や内容の特色を極く簡潔に記述している。その説明内容は主として、ラーフラ・マララセーケーラ・ブダダッタ・パーラナヴィターナの諸氏の論述によっており、それらを超えるものではない⁵⁾。次に「序論」(p. IV) は、Das 自身の解説に入るが、それによればそもそも Dasavatthu というタイトルは、少なくともスリランカにおいては、複数の書物などの名称に用いられていた。即ち、現代においてむしろこれは Vessantarajātaka (J VI, pp. 479-596) を指し、この Jātaka はシンハラ語では Daśadānavastuva とも呼ばれているという。また Saikhyānāma Vibhāgaya (1920) というシンハラ語の辞典によれば、Dasavatthu とは “adānasammata”, つまり例えば Milindapañhā にも見られる「布施すべきでない10の事項」を意味する場合もあるという。しかし今問題の Dasavatthu は、勿論上記のような書名や事項を意味するものではなく、あくまでも、冒頭に列挙した仏教説話文学の一種としてのそれである。Dasavatthu がこの種のテキストを意味する実例として「序論」は、Gandhavamsa⁶⁾ とビルマの仏教文献目録である Piṭakattamain⁷⁾ とビルマの Pagan 碑文⁸⁾ とを挙げている。特に最後の Pagan 碑文に Das, Sah, Sih の順でこの三書が揃って列記されている点 (Nos. 120-122) は、この三書が15C. (同碑文は15C.のものと考えられている) には既に同類の書として知られていた証左として注目に値する⁹⁾。次に「序論」(pp. V-VIII) は、“Editions et manuscrits du *Dasavatthu*” と題して、本書の校訂に際して参照した刊本と写本について記している。それによれば、使用されたテキストは次の10種である。

- 1) 略号 K. パリの la Bibliothèque nationale の一写本 (BN. 343), 19C. の写本、完本にあらず。第36話 Anuruddhatthera の物語で終る。

- 2) 略号 Ka. 同じく BN. 344. 19C.の写本, 第27話 *Uracchadamālā* の話で終る。
- 3) 1898年出版の抄本, 第11話まで。 *Daśadānavastupprakarāṇaya*, édité par A. S. Piris Silva de Maradāna, Pānadura 1897.
- 4) 1916年出版の完本。 *Dasadānavatthupakarāṇam*, édité par W. Andris Silva, Alutgama 1916 (ペラデニヤ大学所蔵本を使用)。
- 5) パラフレイズされたシンハラ語訳本, *Daśadānavatthukathā*, Saddharmakathāmālā aṅka 1.
- 6) 略号 C 1 完全写本, 所蔵者: La bibliothèque du monastère de Madampe, Nigrodhārāmaya, (catalogué n° 132).
- 7) 略号 C 2 同上出所 (catalogué n° 73).
- 8) 略号 C 3 不完全写本 (最終話欠)。所蔵者: La monastère d'Asgiriya (catalogué n° 73).
- 9) 略号 C 4 所蔵者: La bibliothèque du Rév. Waskaduwe Sumana-vamsa, Nayakathera du Kandé Vihāra, Wadduwa. 第1頁欠。
- 10) 略号 C 5 所蔵者: Sri Mahindārāmaya, Colombo. 冒頭部分欠 (第2話の途中より)。

以上10種の *Dasavatthu* の刊本・写本のそれぞれについて、「序論」は解る限りのデータを一々詳しく記述している。例えば刊本の場合は、その頁数や活字の大きさ、字体などを、また写本の場合はその葉数・寸法・一葉の行数・字体・書写年代・コロフォンの有無などについて個々に記載しているし、またそれぞれのテキストを入手閲覧するに際しての格別の協力者についても、その都度その名を特記している。なお字体について一言すれば、1)と2)とは「*mul*の字体」即ち編者によれば、19C.までタイにおいてパーリテキストのために使用されていた古い *Cambodge* 文字の字体で書かれ、他はすべてシンハラ文字である。いずれにしても編者はこれら10種の資料を収集の上、1916年刊行の版本4)を中心として、他の9種の資料を比較校合し、なおかつ *Das* と対応する文章が存在する経典やその註釈中の当該箇所¹⁰⁾を参照するなどして、おそそ可

能な限り厳密な校訂作業を行い、この原典を完成したわけである。なお編者は、入手は出来なかったがスリランカに存在している Das の写本 16 種にも言及している。即ちこの国の寺院所蔵写本の目録である K. D. Somadāsa, ed.: *Lankāve Puskola Pot Nāmāvaliya*, (2 Vols. Colombo 1959-1964) によって、Dasadānavatthuppakaraṇaya (Pāli) という題名の写本 11 種¹¹⁾、Daśadānavastuprakaraṇaya という題名の写本 5 種¹²⁾、合計 16 種の写本の所蔵寺院名とその住所とをカタログ番号と共に列記している。但しその中で「カタログ番号 169」のみは、「カタログ」における記載箇所が評者には不明である。因みにこの写本は「序論」(p. VIII) では Dasadānavatthuppakaraṇaya という題名の写本 11 種の末尾に記載されているのであるが、これに到る 10 種の「カタログ番号」は上より順に 55, 122, 128, 148, 239, 307, 310, 335, 351, 519, 169 となっていて、問題の 169 に到ってその番号が逆戻りして若くなっているのは解せない。「カタログ」中の上記の写本題名の記載箇所には、この“169”という数字番号のみが見当たらないのである。編者は更に、上記 16 種の不見の写本の中には、編者が実際に参照し得た前記の写本と同類のものも存するであろうが、その照合は不可能であったので、この事実は究明出来なかったと述べている。次にヴェレック女史は、自身が実際に写本収集におもむいたスリランカ、そこ以外の上座部仏教諸国に、Das の写本がなお存在するのではないかという問題に触れている。それによればカンボジアとビルマの図書館には編者の調べた限りでは Das の写本は存せず、この両国にこれが現存するか否かは不明であるとしている。また P. B. Lafont の “Inventaire des manuscrits des Pagodes du Laos” にも Das の写本は記載されていないという¹³⁾。しかし編者は、(1) 前述のように Pagan 碑文 (15C.) に Das の名が明記されている事、(2) パリの国立図書館所蔵の二種の写本の文字が 19C. までパーリテキストのためにタイで使用されていた Cambodge 文字である事の 2 点を理由に、Das がインドシナ西部に広く普及していた事を確信している。この点に因んで評者が一言加えるならば、先にも触れた Somadāsa の「カタログ」(Vol. I p. 36 右) の Dasadānavatthuppakaraṇaya の項の「カタログ番号 335」には (Bu) と註記されている。この略号

は「ビルマ文字写本」を意味するものであるから¹⁴⁾、No. 335の写本はビルマ文字のものに外ならない。即ち本写本はスリランカに保存されているビルマの写本なのであって、ここにビルマ写本の存在もまた確認できるのである。

さて「序論」は“Les Texte”の項を立て (pp. VIII-XIII)、改めて Das の所説内容を解説し分析している。それによると、Das の説く 10 の施物とは、(1)食物 (anna), (2)飲物 (pāna), (3)衣類 (vattha), (4)乗物 (yāna), (5)花環 (mālā), (6)薫香 (gandha), (7)塗香 (vilepana), (8)寝具 (seyyā), (9)住居 (vasati), (10)灯具 (padipa) であるが、この「十施物」は *Āṅguttaranikāya* (以下 AN) の *Dāna Vagga* 中に説かれている「八施物」と対応するという¹⁵⁾。というわけは、ヴェレック女史は具体的に何の説明もしていないけれども、上記の10種の物品と全く同一のものが同一の順序で AN のこの箇所に列挙されているのである。これらの10種を8種と数えるには、恐らく anna と pāna とを併せて一項とし、gandha と vilepana とを併せて一項としたものと考えてよいであろう。但しこのような8種に分ける数え方は AN 自身にもまたその註釈書¹⁶⁾にも何の説明もないが、上記の通りに理解して間違いあるまい。つまり AN の「八施物」は実質的には「十施物」なのである。いずれにしても Das の内容全体と AN の *Dāna Vagga* のそれとは今後更に比較検討する必要があるだろう。また Das の全37話を「十施物」の内容に従って分類すると、食物の布施に関するものが7話、飲物が2話、衣類が4話、乗物が3話、花環が8話、薫香が3話、塗香が1話、寝具が2話、住居が3話、そして灯具の布施に関するものが2話となっており、最後の一物話はこれら全体の物話に共通した布施供養の功德の説明をその内容としている。また Das の各物語と同類のものがアッタカターの各書に散見される事も指摘されている (p. IX)。即ち *Vimānavatthu-aṭṭhakathā* と共通する12話を筆頭に、*Dhammapadaṭṭhakathā*, *Paramatthadīpanī* (Thera-Therigāthā-aṭṭhakathā), *Jātaka* (aṭṭhakathā を含む), *Āṅguttaraṭṭhakathā*, *Dighaṭṭhakathā*, *Samantapāsādikā*, *Mahāvamsa* などの名がそこに挙げられている。そして経典との唯一の対応例として、第35話 *Asandhimittā* 王妃の物語が指摘されている。この種のコンコードダンスの一覧は、既に示した通

り本書 p. XIV にも存するわけであるが、このような対応関係は精査すれば今後更に見出される可能性があるだろう。何故ならばアッタカター文献は相互に非常に多くの *pararel passage* や類似の挿話を含んでいるからである。次いで「序論」は、本書の内容の解説を更に続け、布施供養の対象(相手)、布施をなすべき時期(機会)、その功德・目的意義など、いわば本書の「布施思想」について、時には各説話の実際例を引用しながら、論述しているのである。そしてヴェレック女史はこの「序論」の最後を次の一節で結んでいる(p. XIII)。

われわれがここに提出する、布施に関する普及的な^{フントロジー}選文集 *Dasavatthu* は、信仰・道徳そして高潔さ、即ち仏教徒の基本的な徳目において一般信者に対する伝統的教化に関する模範的な一文献なのである。

以上、Das の「序論」に述べられている内容を若干の論評を加えつつ概説して来たが、本節の終りに当って、今後の検討課題として次の問題を提起しておきたい。それは本書の源泉資料(ソース)に関する問題である。本書の索引を一見すると、そこには人名地名寺院名などの固有名詞が当然、数多く含まれているが、それらは原則としてインドの固有名詞のみであって、スリランカのそれは、あったとしても例外的であるように思われる。勿論、厳密なる個々の検討が大前提であるが、若しそうであるとすると、本書のソースは三蔵自身、乃至はアッタカターのソースの中でも「インド起源の原始仏教的古い部分」(評者はこれを「インド的原始仏教的古層」と呼んで「スリランカの上座部仏教的新層」と対比させて考える)と共通するものである事になり、この点では本書は、スリランカを舞台としてスリランカ人の説話を中心とする *Sih* (具体的には、*Duṭṭhagāmaṇi*, *Saddhātissa* 兄弟王に直接間接関係する説話が大半である)とは、そのソースの性格が対照的に相違するものと考えざるを得ない。この点が、前に触れたように、Das はアッタカターや三蔵のどの部分と内容的に対応類似しているかという問題と共に、評者の興味を呼ぶところである。ついでにもう一点だけ批判しておく、本書はスリランカ国王の在位年代として、旧来のガイガーの年代表を使用している。例えば「序論」(p. III)には、*Duṭṭhagāmaṇi* (101-

77 Av. J.C.), Saddhātissa (77-59 Av. J.C.), Mahāsenā (334-361 Ap. J.C.) とあるのがその証拠である。しかしこの年代については Parānavitāna が彼の *A Concise History of Ceylon* に掲載したその最新説によるべきである¹⁷⁾。従って、依然として旧来のガイガー説を採用するならば、少くともその理由を明記すべきではなからうか。因みに最新説では上記三国王の在位年代はそれぞれ Duṭṭhagāmaṇī (161-137 Av. J.C.), Saddhātissa (137-119 Av. J.C.), Mahāsenā (276-303 Ap. J.C.) となるのである。そしてこの年代表に関しては次の Sih においても改められていない。

最後に気付いた限りの誤植を列記しておく。(括弧) 中が正表記である。
 cariya°(ācariya°p. II, l. 28); Buddhagosa (Buddhaghosa p. II, l. 31); Buddhadatta (Buddhadatta p. II, l. 37); Brahmanatīyabhaya (Brāhmaṇatīyabhaya p. III, ll. 28-29); Brahmanatissa (Brāhmaṇatissa p. III, l. 29); p. 65 (pp. 65 et 75, p. IV, l. 36 <=note 3>); Sumanavamsa (Sumanavaṃsa p. VI, l. 24); dehivala (Dehivala p. VII, l. 7); kaluṭara toṭamuṇa (Kaluṭara Toṭamuṇa p. VII, l. 8); pali (pāli p. VIII, l. 30); pali (pāli p. VIII, l. 33); pali (pāli p. VIII, l. 41); p. X (p. XIV, p. VIII, l. 41 <note 1>); -tes indiens et chinois (-tes indiens et chinois p. IX, l. 36).

(3)

次に Sih の問題に移ろう。Sih は現在の形で、総計77の説話(元来は82話)より成り、その内、前半の5章45話(元来は各章10話ずつで合計50話の構成)は、いわば本書の「正篇」とも言うべき部分である。これに対して後半の32話は、後に付加されたいわば「続篇」に相当する部分である。「正篇」では、第3章を中心とする9話のみが、主として西インド Surāṭṭha 地方(Kathiyawal 半島)を舞台とするインドの説話であって、残余の説話は凡てスリランカ各地を舞台とするスリランカの説話である。そして「正篇」の部分は、Paṭṭakottivihāra に住した Dhammanandi (或いは Dhammadinna) 長老という人によって著わされた。一方、本書の「続篇」の説話は、殆どすべてスリランカに関するものばかり

りであるので、この「続篇」を含めて、本書が「正統」二篇より構成される現在の形に最終的に纏められたのは、スリランカにおいてであったろうと考えられる。しかし本書をスリランカにおいてシンハラ文字で校訂出版した故ブッダダッタ師が収集使用した写本は、スリランカに保存されていたもの2本、ビルマより入手したもの1本、合計3本であったが、これらの3写本は共にビルマ文字で書かれていた。

以上が Sih の文献的アウトラインであるが、Das の場合と相違して、このような Sih の存在それ自身やその所説内容は、既にわが国でもよく知られており、若干の研究者によるテキストの文献的研究、テキストを用いての各種の研究、部分的翻訳などが今日までに公表されている。例えば評者自身、文献研究の若干の論文と本書冒頭の部分の和訳を發表している¹⁸⁾。その外、橋堂・片山両氏の論文や翻訳が存する¹⁹⁾。従ってヴェレック女史の新版 Sih に対するわれわれの主要なる関心は、Sih に対する女史の文献研究の成果と、この新版がブッダダッタ師の従来版と如何に異なり如何に改良進歩しているかという二点に集中する。

そこでこの二点に留意しつつ、先ず本書の構成を紹介すると以下の如くである。

序 論 pp. I-XXVI

詩形概説 pp. XXVII-XXXI

略号表 p. XXXII

参考文献 pp. XXXIII-XXXIV

書写に関する凡例 p. XXXV

パーリ原典 pp. 1-158

フランス語訳 pp. 1-178

語彙集 pp. 179-191

目 次 p. 192

物語目次 pp. 192-193

以上の中で冒頭の「序論」の部分は更に次のように分けられている。

Sih の解説と研究 pp. 1 ff.

原典 p. VIII ff.

布施供養 p. X ff.

功德に対する無償の加担 p. XVI ff.

慈悲・憐憫 p. XVIII

精舎の戒律と僧の生活 p. XIX ff.

説教の役割 p. XXII ff.

在家信者の戒律と在家信者の生活 p. XXIV

奇蹟と超自然的なもの p. XXV f.

さて以上のように、編者は「序論」において本書の文献的特色や所説内容に関して概説しているわけであるが、その内、所説内容の解説は比較的詳細でその記述はおおむね妥当であると思われる。しかし本書の文献的概要を論じた部分には若干の問題が存すると考える。その中で次の三点について簡単に論じてみたい。先ずその第一は、Sih の成立年代についてである。この問題に関しては既にブッダダッタ師自身が、彼の Sih の「序論」において、本書のパーリ語は 5C. 前半のブッダゴーサのそれよりも古いと指摘し、その証拠としてブッダゴーサ以後のパーリ語とは相違する、いわば古くて「悪い」形の単語（ブッダゴーサ以前の制作とされている *Dipavaṃsa* (Dpv.) がまさに同様の指摘を受けている）が本書に見られる例をいくつも挙げている。またパーラナヴィターナ教授は、本書に登場する古代スリランカ人の中に *Mahāsena* 王 (276-303) が含まれている事を指摘して、本書の成立は 4C. の事と推定した。彼のこの論述は本書に登場せる多くのスリランカ人の中で *Mahāsena* 王の名にのみ言及している簡単な内容のもの（少くとも詳細な論証がない）であったが、一方、評者自身は Sih に登場するスリランカ人及びインド人を凡て検討し、その中で生存活躍年代（国王ならば在位年代）の判明せる人物を説話ごとに詳しく表示した結果、「正篇」においては、スリランカに関しては年代の判明せるものとしては、*Duṭṭhagāmaṇi* 王 (B. C. 161-137) と *Saddhātissa* 王 (B. C. 137-119) という兄弟王に直接間接関連する物語ばかりである事から、この部分の成立は B. C. 2 C.

の末頃か B. C. 1 C. の初頭頃と推定した。また「続篇」においては、やはり上記の兄弟王をめぐる物語が中心であるが、しかし中には Vattagāmaṇi 王 (B. C. 103-102, 89-77), Iḷanāga 王 (A. D. 35-44), の時代の説話, そして Mahāsenā 王の登場する説話 (第66話) も含まれているので, この「続篇」の部分が現在の形に纏められたのは Mahāsenā 王の時代, 即ち 4 C. 以降の事になると考えた。そして一方で前述のブッダダッタ師の考察をも併せ考慮して結局, 本書の現型成立は A. D. 4 C. の事であったろうと結論したのであった。ところでヴェレック女史は, ブッダダッタ・パーラナヴィターナ・評者自身の三者の上記の所説をそれぞれ併記しつつも, これらはいずれも確定的な根拠がないという見解に立って, 彼女自身, この問題に対して積極的に検討を加えていない。その理由の一つとして, 前節でも触れたように, 彼女自身は相変らずスリランカの王統年代表としてはガイガー説を依用しているので, パーラナヴィターナ教授や評者自身の用いている最新説 (それはパーラナヴィターナ自身の説に外ならない) に基づく年代考証には多分に戸惑いを感じているのではなからうか。しかしながら理由は何であれ, Sih の成立年代に関するヴェレック女史のこのような慎重な態度はかえって賢明であったと評者は考える。そもそも評者が Sih の研究をしたのは今からざっと10年も前の事であり, その後, 評者はアッタカター文献 (本稿では三蔵の直接の註釈書に Visuddhimagga 〈Vis〉を加えた文献群を意味する) のソース自身の研究やソースの年代論を手掛けた。そして今日, その一応の結論を以って改めて Sih の成立年代について再考してみると, 前の結論にはいささかの訂正を加える必要があると判断している。即ち前述のように「正篇」並びに「正統」両篇を併せた現型テキストの成立年代は, それぞれの「ソース資料の年代」として捉えるべきであって, 現在のパーリ原典の成立年代と考えるべきではないというのが現在の評者の意見である。このような修正はアッタカターのソース年代論研究の結論と深く関係している。というのは, アッタカター全体のソース (アヌラーダプラの大寺に秘蔵・伝持されて来たとされる古代シンハラ語等による多種多様な古資料) の最終的な形成凍結年代がまさしく今問題の Mahāsenā 王の時代であり, しかも周知の如く, Dipavaṃsa 並びに Mahā-

vamsa (Mhv) の記述もまたこの王の時代を以って終了しているからである(つまりこの両史書のソースもこの年代迄のものという意味)。このようにアッタカタ―自身, Sih. Dpv. Mhv. の四種類の文献が等しく Mahāsena 王の時代を最下限としているという事実は決して単なる偶然ではなく、古代スリランカの大寺派の古資料の形成がこの時代を以って最終的に終結し(主要部分の形成終結は更に古い時代である)、それ以後はそれは只、凍結温存されていただけであった事を示すものと考えてよい。以上のように Sih の成立年代は、ソースを共通する部分があるという意味で相互に関連せる他の文献との比較において広く考察した場合、前述のような Sih の登場人物の年代の下限は、本書のソースの成立年代の下限を意味するものと考えるのが妥当である。しかしそれでは現在のパーリ Sih の実際の成立年代は何時かという問題が依然残されるわけである。この問題は正確には解決できないのであるが、ただ原著者や原作地の問題と関連ずけて考察すべきだと思うので、次にこの点について論じてみたい。

そこで第二の問題としての、本書の原著者並びに原作地についてであるが、これに関しては Sih の「正篇」の三ヶ所にのみ存するコロフォンが唯一の手掛りであって²⁰⁾、それは次のような表現である。

Kaṇṭakasolapattānavatthabbaṃ Paṭṭakōṭṭivihāravāsika Ācariya-Dhammananditthera.²¹⁾

そしてこの表現を如何に読むかが問題なのであって、ヴェレック女史はこれを次のように解している。

Selon le colophon VIII. l'auteur est le Thera Dhammanandi du monastère Paṭṭakōṭṭi à Kaṇṭakasolapattāna.

これによれば著者 Dhammanandi の住した Paṭṭakōṭṭi 精舎は Kaṇṭakasola という港町 (pattāna) に所在した事となり、従って本書の(少なくとも「正篇」の)

制作地はこの地という事になる。実はヴェレック女史以前に、エッラワラ氏もこれを同様に読解し、

a monk named Ācariya Dhammanandi of the Paṭṭakōṭṭi Vihāra in Kaṇṭakasola-Paṭṭana.

と書いている²²⁾。但しヴェレック女史は、自身の Sih の「参考文献」中にエッラワラ氏の上記の本を挙げてはいないので、彼のこの記述を知っていたわけではないようである。またスリランカ版の編者ブッダダッタ師の記述には矛盾がある。何故ならば、彼は本版の「序論」(p. viii) では、

The name of the author of this work is given as Ācariya Dhammanandi whose native place was Kaṇṭakasola-paṭṭana, and the residing place Paṭṭakōṭṭi Vihāra.

と叙述している。この解釈は Kaṇṭakasolapaṭṭana を原著者の出身地とするものであって、この場合は著者の居住精舎の所在地、即ち Sih の原作地は不明となる。ところが一方、彼は本版の表題においては原著者の事を何故か、

Kaṇṭakasolapaṭṭane Paṭṭakōṭṭivihāravāsīnā Ācariya Dhammanandittherena viracitaṃ.

と叙述しているので、この両者の表現は明らかに相矛盾しているわけである。更にはパーラナヴィターナ教授はこの点を次のように解している。

This is a collection of edifying stories, written in an archaic type of Pāli verse by Ācariya Dhammadinna, a native of Kaṇṭasolapaṭṭana, who resided in the monastery called Paṭṭakōṭṭi-vihāra. (下線は評者)

言う迄もなくこの読解はブッダダッタ師の「序論」中のそれと一致する。そこで問題は Kaṇṭakasola 港町を Paṭṭakōṭṭi 精舎の所在地と解するか、原著者の出身地と解するか、という点にある。そしてこれは結局、Kaṇṭakasolapaṭṭana-vatthabba の“vatthabba”を如何に解するかという問題に帰着する。即ち明らかにヴェレック女史やエッラワラ氏は、この語を十分検討せずに読解したまうであるが、パーラナヴィターナ教授はこれを原著者の出身地を示すものと解しているのである。評者自身は結論的に言って、これは出身地を示す語と考

え、ここで新たにアッタカター文献に見られる他の好箇の用語例を例示したい。それは Vis のコロフォンに見られる著者ブッダゴーサについての次の記述である²³⁾。

Mahāvihāravāsīnaṃ vaṃsālāṅkārahūtena vipulavisuddhabuddhinā Buddhaghoso ti garūhi gahita-nāmadheyyena therena Moraṇḍacetakavattabbena kato Visuddhimaggo nāma.

この文章では“Moraṇḍacetakavattabba”の一語は明らかにブッダゴーサの出身地を示しているのであり、現にこの出身地がどこであったのかという研究もなされている。但し Vis の上記の例は“-vattabba”であって“-vatthabba”ではないが、PTSD によれば両者は同一の意味を有するものの“vattabba”の方が正しい形のようなのである。いずれにしても以上の例証によって、ヴェレック女史などの解釈は訂正さるべきものと判明したであろう。因みに Dhammanandi の出身地 Kaṇṭakasola という港町とは、2C.のギリシヤの地理学者・天文学者であったプトレマイオス(Ptolemaios, Ptolemy)が記述している Maisōlos (Kṛṣṇa 河) の河口に近い中央市場 Kantikossula (Kantakassulos, Kaṇṭakossyla) に外ならないと考えられている²⁴⁾。そしてこの Kaṇṭakasola は現在の Ghaṇṭasāla に相当するとする説がある。この地はクリシュナ河々口 Masulipatnam の西方13マイルに位置し、ここには B. C. 2 C. に建造された仏塔が存在していたと言われている。そして以上のような Kaṇṭakasola の場所の比定に関してはヴェレック女史も同じ見解を開陳している(「序論」p. III)。ただ繰り返しになるが、彼女はこの地を Dhammanandi の居住精舎の所在地、即ち Sih 制作の地と考えているが、この点は前述のように訂正されなければならない。

以上の検討によって、Paṭṭakottivihāra の所在地がどこであれ、Dhammanandi が南インドの出身者でスリランカに関係の深い人物であった点は疑う余地がない。(Sih には南インドのAndhakarajja <王国>の名も出て来る、第65話)そして南インド出身のパーリ文献制作者という事になると、われわれは多くの著名なるアッタカター制作者を直ちに想起する。即ち現在のパーリ・アッタカターの制作者の中でその名前が判明しているのは、Buddhaghosa, Dhammapāla,

Buddhadatta, Upasena, Mahānāma の5人であるが、彼等の中で最初の3名はインド人であった。ブッダゴーサ(5C.前半)は従来北インドの出身とされていたが、最近の研究では、南インド出身説が有力となりつつあるし、ダンマパーラ(5C.後半頃)が Paramatthadīpanī 等を著わしたのは南インドの Nāga-paṭṭanaであったとされ、またブッダダッタ(5C.前半頃)は南インド Uragapura(現在の Trichinopoli 近郊の Uraiyūr)の出身で同じく南インド Coḷa 国(多分その Kāveri-paṭṭana=Bhūtamāṅgala)において、彼の Buddhavaṃsaṭṭhakathā 以下の制作をしたと考えられる²⁵⁾。このようにブッダゴーサ以下のパーリ註釈制作者の中の過半の者はインド出身、それも特に南インドと関係が深かったわけであり、かつ彼等の年代は恐らく余り隔りがなかった。そうすると、Sih の制作者たる南インド出身の Dhammanandi もこのような註釈制作者のグループと同類の存在として位置づける視点がここに生まれて来ると思う。勿論、Sih は本来の意味では註釈文献ではないが、しかし広義のアッタカター文献の一種であり、しかもそのソースは註釈文献のそれと多く共通しているものである。いずれにしても彼 Dhammanandi が南インド出身でスリランカに縁の深かったパーリ文献制作者であったことは明らかであり、この点で上記の註釈制作者と共通している。このような事情を総合判断して、評者は、彼がブッダゴーサの時代の前後に活躍した人ではなかったかと推測する。因みに先にブッダダッタ師の指摘した、Sih のパーリ語がブッダゴーサ以前の古く悪い語であったという点も、彼 Dhammanandi の個人的能力乃至は傾向の故と考えれば、そこに特に矛盾は生じないであろう。

さて次には第三の問題についてであるが、それはヴェレック女史の述べている Sih 原典の分量の問題である。彼女は「序論」(p. VII)において、ブッダダッタ版の p. 135 に存する「目次」に、これら50話(いわゆる「正篇」の部分)は2500 gāthā より成ることが記されている点を指摘しつつ、本書のこの部分は実際には1320 gāthā しかない、と述べている。同様にして、同版の末尾(p. 170)には、この後半の32話(「続篇」部分)は500 gāthā より成ると記されているのに、実際にはわずかに8 gāthā しか存せず、Sih 82話の全体では

3000 gāthā があるべきところ、実際には 1328 gāthā があるのみであると指摘している。彼女自身それ以上は何の説明も加えていないが、この指摘はブッダダッタ版の「目次」や末尾の記述（これらは何故かヴェレック女史は自分の版には収めていない）が誤りであるとするよりは、現在の Sih が元来のものの一部であるのか、改竄されているものであるのかのいずれかである点を示唆したかったものと考えられる。しかるにこの問題についても、やはり彼女は誤謬を犯していると見られる。というのは、彼女は文字通り本書の gāthā の数のみを数え挙げて、前半は 1320 gāthā、後半は 8 gāthā としているのであるが²⁶⁾、実際は、この場合の分量計算は韻文と散文の両方を合した全文章の分量を一定の規準に従って数えるべきなのである。即ち仏典の分量の計算は、通常、いわゆる Śloka の音節数、つまり32母音を以って一頌とする方法によってなされるのである²⁷⁾。例えば古来言われて来た「八千頌般若」、「二万五千頌般若」、「十万頌般若三百二十万言」などという表現は、凡てこのような計算方法による仏典の分量を示しているわけである。そこでこの基準方法によって Sih の分量の概算を試みた。その具体的計算方法は、

(1) 散文の行が頁の左端より右端まで紙幅一杯となっている行を、無作為に 100 行抽出し、各行の平均母音数を計算するとそれは 27.77 であった。
(ヴェレック版はタイプ印刷本であるので、各行の左端は揃っていても、右端は若干の凹凸があって不揃いである)。

(2) 上記(1)の行と異なり、行の途中迄で文章が切れている短い行を凡てチェックしその総母音数を計算した。

(3) ヴェレック女史の計算した韻文の全 gāthā 数。以上の三分類の分量を合計すると、「正篇」の概算は、

$$(1)471+(2)83+(3)1320=1873 \text{ (頌)}$$

同様にして「続篇」は、

$$(1)493+(2)30+(3)8=531 \text{ (頌)}$$

となり、「正篇」は前記の 2500 gāthā には達しないが、「続篇」は 500 gāthā を超えている。両篇を合すると、Sih 全体では

1873+531=2405 (頌)

となり、なお 3000 gāthā にはかなり不足している。「正篇」は元来50話あるべきところ、実際には45話しか現存せず、その故に 2500 gāthā に達しないのであろう。しかし逆に「続篇」は本来の gāthā 数 500 を 6% 程オーバーしている。いずれにしても Sih 全体では本来の 3000 gāthā (これは勿論概数であらう) に 600 頌近く不足している計算となる。しかしこれはヴェレック女史の算定した韻文数のみの合計である 1328 gāthā という数字よりははるかに 3000 という数字に近い値であり、恐らく評者のこの計算基準が正しいであろう。但し以上の計算はあくまでも一つの概算であって、本当に正確を期するならば、凡ての母音数を片端から全部計算しなくてはならない。しかし上記の推計でも本書の大体の分量は把握出来たと考えるのである。

さて次にはヴェレック女史のローマ字版 Sih のテキストそのものについてであるが、本版は原則としてブダダッタ版をそのままローマナイズしただけのものであって、別に新たなる写本を校合した改訂版ではない。脚註の variants までも同一である。編者はスリランカにおいて Sih の未知なる写本の発見に努めたようであるが(評者への私信による)、残念ながらその努力は実を結ばなかった。それはともかくとして、本書の「書写に関する凡例」にも記されているように、niggahīta “m” の表記に関してはだけは、シンハラ文字版の元の表記を次のように改めている。即ち母音及び唇音の前の “m” を “m” と転写し、また “ca”, “ce” の前では “m” を “ñ” とし、同じく “ti” の前で “n” はとしている。そして、ブダダッタ版との対照の便を計って、彼が付した説話の番号や各 gāthā の番号はそのまま残している。しかし彼が加えたと思われる文中のカンマなどは時にこれを削除している。更に、PTS 版などの通常のローマ字本とは相違して、文頭及び固有名詞の冒頭の一字を大文字で書いていない。言う迄もなく、南方の諸文字には元来、大文字・小文字の別は存しないから、原写本においては如何なる場合でも、文頭や固有名詞の冒頭が大文字で表記されているということはある得ず、従ってこの点に関してはヴェレ

ック女史のこのローマ字本は原写本の表記に忠実であると言えよう。以上のよりに表記方法には若干の差異があるが、ヴェレック版のテキストはブッダダッタ師の従来版をローマナイズしただけのものである。だがしかしテキストそのもの以外に有益な部分が色々と付加されている。それは既に示したように、「詩形概説」(Conspectus metrorum)において本書の全 gāthā の詳細な分類整理がなされていたり、また巻末の「語彙表」(Glossaire) もかなり研究的であって、表中の固有名詞などに対してはマララセーケーラ博士の *Dictionasy of Pali Proper Names* などを参照にして、或る程度のコメントや説明を付している²⁸⁾。女史のフランス語訳自身は勿論、Das の場合と同様、最初にして唯一(現在のところ)の近代語による全訳であり、その学問的功績は大きい。いずれにしても、本版はわれわれにとって比較的親しみの薄いシンハラ文字本をローマナイズして、馴染やすい標準普及版にしたという点、その上、色々な付随的研究資料を付加しているという点で、テキストそのものも従来版を一步進歩改良せしめたものと言ってよいであろう。

(4)

本「書評」の最後に、ヴェレック女史のこれら二書に因んで次の三点を指摘しておきたい。その第一は、彼女の次の研究出版についてである。彼女よりの私信によれば、彼女は既に Sah の未知なる写本 3 種を入手していて、Sih の次には、同様にして Sah の原典・仏訳の刊行を意図していた。従って Sih の刊行を果した現在、Sah の新校訂本(恐らく同じくローマ字本)並びにそのフランス語訳を準備中のことと推察され、これも遠からず出版されるものと期待される場所である。言うまでもなく、現在のところ Sah のテキストとしては Sih の場合そうであったように、故ブッダダッタ師の手に成るシンハラ文字版が存するだけであるので²⁹⁾、新発見の写本と校合の上での新テキストの公刊は学界への大きな貢献となるであろう。

次に第二の点であるが、一般的な問題として周知の通り、多年にわたってパーリ語のローマ字文献は世界各国の学者の協力によってロンドンの PTS にて

統一的に整然と刊行され続けて来て、この PTS 版が一応パーリ原典の標準版となっていたわけである。この点は世界各地で随意に出版されているサンスクリット原典の場合と大いに事情を異にし、これはいわばパーリ研究の利点であったと思われる。しかしながら近年、フランスあたりで上記のように一連のローマ字本パーリ原典が相次いで刊行されたとなると、いわゆる南方諸国版については別問題としても、ローマ字本についてさえもわれわれは PTS 版のみに関心を向けていけばよいという時代は終り、フランスなどの出版情報にも注意を払っていく必要があるようになったと考えざるを得ない。因みに彼女の出版のみならず、例えば、

Eugene Denis: *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du Buddhism ancien*, 2 Vols. 1977³⁰⁾

などもこのような最近の新しい傾向の一例と言えよう。

最後に第三点として、ヴェレック女史の一連の研究に関連した今後の課題について総括しておきたい。既に繰り返し述べているように、従来の南方版を改良したローマ字標準版とその仏訳とを併せて出版した彼女の原典校訂者あるいは翻訳研究者としての業績を評価しない人は誰れもいないであろう。しかしながら各書「序論」に示された文献研究は、多く概要解説の域を出ず（一般に校訂者や翻訳者の著わした「序論」にはこの様な傾向のものが多い）、今後多くの問題が残されていると考えられる。例えばこれら一連のスリランカ仏教説話文学相互の比較研究や、更には広くアッタカター諸文献や三蔵經典との対比検討、またはこれら各書の中心テーマ（例えば布施思想など）の多角的研究、あるいは歴史資料としての活用などは今後の大きな課題であろう。このように原典・翻訳出版の次に、当然提起される文献的思想的諸研究に関しては、われわれが研究に参加し学界に貢献し得る大きな余地がなお残されているわけであり、またそのような努力が待望されているものとするのである。

註（特記のない限り、本稿使用のパーリ原典は凡て PTS 版である。）

- 1) この時の講演報告は後に京大の大地原教授によって和訳されて公刊された。
大地原豊訳「コレット・カヤ：フランスにおける1965年以降の古典インド研究」

- (『鈴木学術財団・研究年報15』1978, 47—60頁)。この中で54頁右と59頁右(註43)にヴェレック夫人のこの研究に関する言及が見られる。それによると、同夫人はA. バロー教授の門下である事が知られる。
- 2) 彼はその時、本書の出版情報については何も触れず、ただ高名な Filliozat 教授の令嬢で Jacqueline Filliozat という人(現姓では呼ばなかった)が Das の研究をしていると語っただけであった。従って評者が本書の出版情報を初めて正確に得たのはカヤ女史のこの報告からであったし、また Sih と関係のある事もそれまでよく知らなかった。
- 3) A. P. Buddhadatta, ed.: *Sahassavatthupparāna*, Ambalangoda 1959.
Saranatissa Thera, ed.: *Rasavāhini* 2 pts. Jinaloka Press, Colombo 1913—1920.
A. P. Buddhadatta, ed.: *Sihalavatthupparāna*, Ambalangoda 1959. なお橋堂氏は14C. の Medhankara Saṅgharāja 作とされる Lokappadipakasāra もこの種の説話集の中に加えている(橋堂正弘「Sihalavatthupparāna と Lokappadipakasāra」『印仏研』19巻2号819—821頁)。
- 4) 拙稿「アッタカター文献の種類範疇」(『印仏研』25巻1号, 83—88頁)。
- 5) W. Rahula: *History of Buddhism in Ceylon*, Colombo 1956 pp. XXvii ff.; G. P. Malalasekera: *The Pali Literature of Ceylon*, Colombo 1928 pp. 128, 129, 162, 210, 223 ff., 226, 230, 247; A. P. Buddhadatta, ed.: Sih (op. cit.) pp. Vii-X; A. P. Buddhadatta, ed.: Sah (op. cit.) pp. XXiii-XXvi; S. Pararivitana: *Ceylon and Malaysia*, Colombo 1966, pp. 3 ff.
- 6) JPTS 1886 pp. 65, 75. 但し「序論」は p. 75 の例を見落している。
- 7) Rangoon 1906, 但し「序論」は出典として M. Bode: *The Pali Literature of Burma*, London 1909, Introd. p. X, p. 104, note 9 を挙げている。
- 8) 但し「序論」の出典は Bode: *ibid.* p. 101; Forchhammer: *Inscriptions of Pagan*, Rangoon 1902, p. 50; Pelliot: *Deux Itinéraires*, (BEFEO Vol. IV, p. 183).
- 9) Bode: op. cit. p. 104 f.
- 10) Cf. “Table des concordances” 本書 p. XIV.
- 11) 同カタログ Vol. I, p. 36 右。
- 12) 同カタログ Vol. II, p. 28 右。
- 13) 「序論」p. VIII, note 2.
- 14) カタログ Vol. I, p. Xi 「略号表」参照, ここには“(Bu)=Buruma akuru”とある。
- 15) AN IV-239.

- 16) *Anguttarattakathā* IV-126.
- 17) これについては拙稿「スリランカ王統年代論再考——W・ガイガー説修正の研究史——」(『仏教研究』第6号(1977年2月)84—108頁)参照。
- 18) 拙稿「Sihalavattthupakarāṇa について」(『印度学仏教学研究』21巻1号 pp. 429-436); 拙稿「Sihalavattthupakarāṇa の資料的特徴」(『インド思想と仏教——中村元博士還暦記念論集——』春秋社, 昭和48年 pp. 309-322); 拙訳「Sihalavattthupakarāṇa 訳註(I)——第1章第1・2話——」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第5号 pp. 191-202); 拙訳「Sihalavattthupakarāṇa 訳註(II)——第1章第3・4・5話——」(『城西人文研究』創刊号 pp. 80-101).
- 19) 橋堂正弘「Sihalavattthupakarāṇa について(一)」(『印度学仏教学研究』18巻1号 pp. 142-143); 同「Sihalavattthupakarāṇa と Lokappadipakasāra」(同上誌19巻2号 pp. 330-332); 同「Sihalavattthupakarāṇa に見られる在家生活」(『椴山女学園大学研究論集』第9号第1部 pp. 1-7); 片山一良「和訳『セイロン餓鬼説話』上」(『駒沢大学仏教学部論集』第6号 pp. 169-189); 同「和訳『セイロン餓鬼説話』下」(同上誌第7号 pp. 217-231).
- 20) 本文第8話, 第20話, 第50話の末尾にそれぞれ存するもの。ブッダダッタ版では pp. 35, 62, 134; ヴェレック版では pp. 31, 55, 126.
- 21) 但し(括弧)はそれぞれの異表記である。Kaṇṭakasola (Kaṇṭasola, Kaṇḍakasola); Paṭṭakottī (Haṇḍakoṇḍa, Saṇḍakonti); Dhammanandi (Dhammadinna).
- 22) H. Ellawala: *Social History of Early Ceylon*, Colombo 1969, p. 4.
- 23) Vis p. 712. Cf. HOS 版 Vis p. 614.
- 24) Paranavitana: op. cit. p. 3.
- 25) 彼等5名については評者は詳細なる吟味をして, 例えば本文の様な結論を得ているが, その全内容はいまだ未刊である。
- 26) この事は特に「続篇」の gāthā 数8としているのが, そこに含まれている gāthā (番号付きの韻文) の数と一致している事で明瞭である。
- 27) この外, bhāṇavāra (誦分) という計算単位もある。一誦分は8000母音である。(A. P. Buddhaddatta: “The Second Great Commentator, Ācariya-Dhammapāla”, *University of Ceylon Review* Vol. III, No. 2, p. 49, note 1), 従ってこれによって問題の分量を表現すると, 2500偈とは10誦分, 500偈とは2誦分に相当する。
- 28) 但しその内容は多くの場合, この DPPN の記述の域を超えるものではない。
- 29) 註3参照。
- 30) 桜部 建「ローカパンニャッティについて」(パーリ文化研究会編『パーリ仏教文化研究』山喜房 1982年, pp. 23~32) 参照。
- (昭和56年度文部省科学研究費<総合研究A>による研究成果の一部)